書評論文

リチャード・ボウカム他著
『人生を聖書と共に—リチャード・ボウカムの世界—』
新教出版社、2016 年

吉平敏行

両極化による分断が進み、混迷を呈してきた時代に、信頼できる聖書学を探し求める者、「神学」の枠を超えて「信仰」によって現実を生きようとする者は、この人を避けては通れまい。さらに『イエスとその目撃者たち—目撃証言者としての福音書』（浅野淳博氏訳）を読みたくなる。日本の福音派[1]研究者から、主流派[2]の研究者に聖書釈義の再考を促す「架け橋」となり得る一冊である。

説教準備で、正確な釈義に努め、正統的な解釈を逸脱せず、日常への的確な適用を考えると、聖書学の動向を知る作業は欠かせない。「神」学は「神の」民が、苦難を生き延びるために仕える学問であり、牧師には、信徒に日用の糧を供給する大切な道具（ツール）となる。古い道具では現代の素材を的確に処理することは難しい。本書は、保守的な陣営と編集史批評に固執する陣営を繋ぐ、最新の道具として投げかけられたボウカム神学研究の入門書になっている。

本書出版の 2016 年に古希を迎えたリチャード・ボウカム氏の 4 度目の来日に合わせ、指導を受けた著者 5 名と新約学者 2 名が氏の研究手法の蓄積を紹介

---

[1] 藤原淳賀「福音派神学の動向、問題、および展望」（『福音主義神学』46 号所収）27～48 頁参照。聖書中心主義で「学術的オープンさと社会への関わり」（38 頁）を重視する立場。

[2] 明治期に遡る日本キリスト教会史で主に扱われる教派、教団。評者は「福音派」と「主流派」は対置しない術語と考えるが、それに代わる表現が見つからない。

しようと、著書及び論文（集）、訳書を、研究の経緯も含め、主要な点を押さえて纏めたものである。ボウカム氏の資料収集と緻密な分析、それに基づく聖書釈義、新約聖書神学、さらに組織神学（キリスト論）、哲学的な領域から環境問題に至るまで、氏の分析の的確さ、学識の幅広さが際立ってくる。

冒頭、本書タイトルとなる「人生を聖書と共に」をボウカム氏自身が、自らを「同僚」と呼ぶ、セント・アンドリュース大学教授マーク・エリオット氏が「リチャード・ボウカムとはどういう人か」を寄稿し、ボウカム氏の「比類なき新約聖書学者」（山口氏のあとがき）形成過程を辿ることができる。

30 年ほど前、神学校卒業したての評者は、ガラテヤ書 2 章 16 節の解釈に行き詰まったとき、ジェイムズ・ダンの「新約学の新しい視点」[3]で新たな釈義方法を知った。神学校で聞いていたユダヤ教文書の数々が、既に解読、分析され、パウロ神学の再解釈にまで進んでいることを知り、衝撃を受けた記憶がある。新約聖書は、もはや第二神殿期パレスチナ・ユダヤ教の社会的文脈を知らずには読めない。本書により、ユダヤ教文献研究が緻密になり、さらに使徒後の伝承記録（記憶）へと、釈義の基盤も幅も広がっていることを知った。

評者が初めてボウカム氏の著書を原文で読んだのは、本著者の一人岡山氏から贈られたルツ記の小冊子である[4]。聖書が男性中心 (androcentric) に書かれているとの批判に応えたものだが、氏の緻密な論理展開に驚いた。爾来、ボウカム氏の名は忘れなかったが、2000 年に牧師を辞して“流浪の民”となり、2005 年から自給開拓を始めて、聖書研究から遠退いていたが、懐かしい著者らの名前を見て本書を取り、リチャード・ボウカムに「再会」することとなった。

「ユダ書と初期キリスト教会におけるイエスの家族」から、伊藤氏が「クロパ」(ヨハネ 19:25）と「クレオパ」（ルカ 24:18）がイエスの親戚の一人であったこと、「初期キリスト教史料で、イエスの家族が『デスポイノス』と言及されて

[3] ジェイムズ・D・G・ダン『新約学の新しい視点』山田耕太訳（すぐ書房、1986 年)

[4] Richard Bauckham, *Is the Bible Male? The Book of Ruth and Biblical Narrative* (Grove Books Limited, 1996) 平易な言葉で、よくもここまで切り分けられると驚いた。

いることは、勉強不足で今まで知らなかった」と驚きを隠さなかったことに、ボウカム氏の研究手法に聖書の個人名に至るまでの緻密な裏付けがあることを感じ取った[5]。手許のワード聖書注解シリーズ、ボウカム氏のペトロの手紙二とユダの手紙の新約学における価値も伊藤氏の指摘によって再認識した。

岡山氏による論文集「預言の頂点—ヨハネ黙示録の研究」の紹介により、苦手意識の強い「黙示録」を、現代社会への神の警告として読む必要に迫られた。従来、黙示録は各章を断片的に扱わざるを得ず、統一性まで思いが至らなかったが、ボウカム氏の「その神学はユダヤ黙示文学をはるかに越えた独創的なもの」との言葉に、黙示録の啓示的独自性が確信せられた。岡山氏の「現代を覆いつつある巨大な闇の力の本質を洞察し、屈することなく、黙示録に示された希望の力によって勝利する」との断定は、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件に危機感を覚え、ボウカム氏の下で研究を継続したゆえの確信であろう[6]。

山口氏の「分かれ道—何が起き、なぜ起きたのか」は、第二神殿期のユダヤ教文献研究が新約聖書解釈に欠かせないことを明確にしている。エルサレム神殿への礼拝参加が、ユダヤ人キリスト教徒とクムラン共同体では異なり、「異邦人を異邦人のままで神の民に迎え入れるという決断は、キリスト教徒たちこそが終末的な神殿であるという確信から導かれる」との指摘は納得がいく。「教会はキリストの体」と記すパウロ書簡で、「神殿」に該当する教会を、信仰主体に考えるか制度主体に考えるかで教会形成にも違いが出るが、第二神殿期ユダヤ教文献を精査する研究方法により統合へのきっかけも掴めそうである[7]。

[5] 「イエスとその目撃者たち」巻末に、四福音書における無名・有名の登場人物、パレスチナ・ユダヤ人の間で人気の高い男性名ベスト 99、同女性名ベスト 31、福音書と使徒言行録に登場するパレスチナ・ユダヤ人男性、同ユダヤ人女性、十二弟子名、エイレナイオスが言及する使徒、など 22 頁に及ぶ図表が掲載されている。

[6] 本書に出版予定とある、リチャード・ボウカム『聖書と政治—福音を社会にどう適用するのか』岡山英雄訳（いのちのことば社）は、2017 年 5 月に発売されている。

[7] 福音派教会系では信仰を強調する傾向が強く、主流派教会系は古代信条や信仰告白を重んじ、制度を強調する傾向が強い。教会観や信仰理解に違いがあると、評者は見ている。

浅野氏は、自身の訳書『イエスとその目撃者たち』から、様式史批評を前提とした福音書形成過程の理解が、ボウカム氏が歴史家として「パピアス断片」の序説部を分析することにより克服してきたことを紹介する[8]。目撃者の回想的記憶は信頼でき、「福音書の背後に目撃者証言が透けて見えるのであり、目撃者証言とは史実とその解釈の不可分な融合体である」とする、新たな福音書理解に転じたことを紹介する。浅野氏が「今後の展望」で、パウロ神学に与える影響を指摘したことは重要である。パウロ書簡から浮かび上がるイエス像により、キリスト者が「イエスの生き様に倣うことの意味を再確認」し、より具体的に信仰を生きることへの希望が湧いてくる[9]。

小林氏は、「イエスとイスラエルの神—『十字架につけられた神』と新約聖書における神としてのキリスト論」を紹介し、「『最高度』のキリスト論」が、「本性」や「性質」という区分ではなく、「イエスが実践した神的な機能や働きこそが神のアイデンティティに固有」との主張にあること、「初期キリスト教においてキリストは、・・・神の側に属する存在として明確に理解されていた」と紹介する。釈義から組織神学にまで向かうボウカム神学の、堅実さと独創性は、信仰者を天上のキリストにまで近づける霊的な力強さを感じさせる[10]。

横田氏は献呈論文集「他の被造物と共に生きる—緑の聖書解釈と神学」を「聖書とエコロジー」の問題として紹介する。キリスト教神学が近代の自然破壊の原因となったかのような誤解に、古代から近代に至る人間の「自然支配」の変遷を辿り、原因は聖書テキストにではなくギリシャ哲学から出た人間の優越性、ルネッサンス人文主義者たちの人間が神のように支配する考え方に影響

[8] 「イエスとその目撃者たち」が、2007 年に *Christianity Today* の Book Award を、2009 年に『Michael Ramsey Prize』を受賞したことを浅野氏が紹介している。

[9] たとえばガラテヤ 2:10、エルサレム教会の柱と目される 3 人が「貧しい人たちのことを忘れないように」との指摘に、「信仰のみ」の福音に、「貧しい者への施し」が軽視される「種」(「蒔いたもの」同 6:7–10 参照) があることを察知していたのではないか。信仰に生きるキリスト者が「物質的施し」を考えることは、格差の問題を考える契機になるのでは。

[10] ボウカム氏が、なぜドイツの組織神学者ユルゲン・モルトマンを「重要な人物」に挙げ、聖書学だけでは成し遂げられない「聖書に根ざした創造的神学」に進んだかがわかる。

されたゆえ、と応える。自然の『非神聖化』という術語の紹介に、日本人の自然に対する馴れ合い意識を再考する必要を教えられた[11]。

遠藤氏は「栄光の福音書—ヨハネ神学の中心主義」から、ボウカム氏のヨハネ神学を 8 つのテーマから概観する。特に、イエスと個々の信仰者との「個別的関係性」の強調、同時に一つの神への信仰による「ひとつに結ばれたイスラエル」の視点が「終末に向かってこの世に共同体の一致の可能性を開いていく」との指摘は、パウロの異邦人キリスト者とユダヤ人キリスト者による「一人の新しい人に造り上げ」(エフェソ 2:15) に見る「終末的教会」を想起させる。ヨハネ神学では慣れ切っていた鍵語に、新しい光が差し込んだ感がある[12]。

著者らの逸話は、さながら「ボウカムとその目撃者たち」の趣を伴う。Web を開けば[13]、氏の膨大な著書、論文、説教、俳句まで見ることができる。氏は按手を受けた教会教職ではないそうだが、それにもかかわらず Scholar-Pastor としての魅力ある姿が浮かぶ。「証言のイエス」は、歴史のイエスと信仰のキリストという神学的二分法を越えるのみか、キリスト者がキリストの生き方に倣うという、信仰と実態が融合した信者を育てる指針になるであろう。今日必要なのは、両極化を加速させる“神学”ではなく、両極を繋ぐ専門性を持つ“神学者”である。リチャード・ボウカム氏の「比類なさ」はそこにある。

(日本キリスト教会雲雀ヶ丘伝道所牧師)

[11] 横田氏の「自然を汎神論やアニミズム的意味でのカミとして崇拝することもしない」との指摘は、自然大災害に対する日本人の具体的取り組みを再検討する手掛かりを与える。

[12] 遠藤氏による「ラザロの蘇生」という新たな訳出にも何らかの意図があるのであろう。

[13] http://richardbauckham.co.uk/